

# 古典文法書間で「む」「むず」の 記載内容はこんなにも違う・その2

——「む」と「むず」の違いを大学等の入試問題で問うことは妥当か——

福 嶋 健 伸

## 1. 古典文法書の間で説明に差異がある

福嶋（2020）では、高校で使用されている古典文法書を対象とし、助動詞の「む」「むず」について、以下の観点から調査を行った。

- (1) (i) 「む」「むず」の意味に何を立てるか
- (ii) 〈假定〉と〈婉曲〉を分けるか
- (iii) 〈勧誘〉と〈適當〉を分けるか

その結果、古典文法書間で、看過できぬ差異が見られることが分かった。高校で用いられる古典文法書等の調査は、小田（2014）や小田（2016）以外に、あまりなされていないため、「文法書間で差が見られる」という問題が顕在化していないように思われる（なお、小田（2014）や小田（2016）は、「用言」「副詞」「敬語」「助詞」「助動詞」等も含めた広い観点から調査を行ったものである）。

しかし、この問題は、古典文法の学界でも、古典文法教育の現場でも、いずれは、向き合わなければならない問題である。また、大学等の入試問題に関しても少なからぬ影響がある。

何より、まず、現状を把握しておく必要があるだろう。そこで、本稿では、福嶋（2020）に引き続き、高校で使用されている古典文法書を対象とし、助動詞の「む」「むず」について、次の点を調査していきたい。

(2)

- (2) (i) 未然形の「ま」をたてるか
- (ii) 「ん」「んず」の表記に言及があるか
- (iii) 「む」と「むず」の意味に違いがあるとするか

古典文法書で学習した高校生であれば、「む」の未然形「ま」や、「ん」「んず」という表記に関して、ある程度、共通した情報を有していると考えてよいのだろうか。一度、確認してみる必要があるだろう。

また、実際に、以下のような問いも見られる。

(3) 次の  に適する語を後から選び、記号で答えよ。

(略)  ④ と比べ、 ⑤ のほうが、より口語的な言葉である。

[ア むず    イ む    ウ 意志    エ 婉曲    オ 推量]

(『よくわかる 新選古典文法』 p.51。引用元は問題文がゴシック)

これは、古典文法書の「チェック」という所の問いである。答えは、「④イ」「⑤ア」であって、「むず」の方が「む」よりも口語的であるという、「むず」と「む」の違いを問うたものになっている。この答え自体は誤りではないだろうし、古典文法書の理解度を確認したいという設問の意図も理解できる。

しかし、このような問い（「む」と「むず」の違いを問うようなもの）は、大学の入試問題として考えた場合、適しているといえるのだろうか。

本稿の調査は、このようなことの回答の一つになると考えている。

## 2. 調査対象

本稿の調査対象は、高校で用いられていると思われる次の古典文法書（15種）である。福嶋（2020）と同様の調査対象であるが、一部、版等が新しくなっているものがある（本稿の引用では反映できないが、実際には、カラー刷りのものもある）。

(4) 調査対象とした古典文法書

(〔 〕内は本稿における略称である。初版の出版年順に示す)

『新訂 古典文法』[大修館 1] (大修館書店、1986年3月1日初版 1刷、2011年4月1日 21刷)

『読解をたいせつにする 体系古典文法 九訂版』[数研] (数研出版、

- 1990年2月1日初版第1刷、2021年5月1日九訂版第6刷)
- 『楽しく学べる 基礎からの古典文法〈三訂版〉』[第一学習 1] (第一学習社、1992年2月1日初版、2020年1月10日改訂30版)
- 『古典にいざなう 新古典文法』[大修館 2] (大修館書店、1992年4月1日初版第1刷、2017年4月1日第16刷)
- 『生徒のための古典読解文法』[右文書院] (右文書院、1992年4月1日初版、2013年4月20日改訂16刷)
- 『古文読解のための 標準古典文法〈三版四訂〉』[第一学習 2] (第一学習社、1995年1月10日初版、2019年1月10日改訂25版)
- 『【基礎から解釈へ】新しい古典文法 四訂新版』[桐原書店] (桐原書店、1996年1月10日初版第1刷、2021年1月10日四訂新版第25刷)
- 『よくわかる 新選古典文法』[東京書籍] (東京書籍、1997年2月1日初版、2021年2月1日第24刷)
- 『古文解釈のための総合力を養う 完全マスター古典文法〈新版五訂〉』[第一学習 3] (第一学習社、2000年1月10日初版、2020年1月10日改訂21版)
- 『新修 古典文法 二訂版』[京都書房] (京都書房、2000年1月10日初版第1刷、2021年1月15日二訂版第16刷)
- 『標準 新古典文法』[文英堂 1] (文英堂、2000年1月20日第1刷、2016年第22刷) ※本稿執筆時、重版の予定なし。
- 『詳説 古典文法』[筑摩] (筑摩書房、2012年12月10日初版第1刷、2018年10月10日初版第4刷)
- 『読解のための必修古典文法〔改訂版〕』[文英堂 2] (文英堂、2013年1月20日第1刷、2021年第9刷)
- 『必携 古典文法』[明治書院] (明治書院、2013年2月1日初版、2021年2月10日9版)
- 『読解する力がつく精選 古典文法』[三省堂] (三省堂、2015年3月10日第1刷、2015年12月20日第3刷)

次節以降、調査結果を示していきたい。

### 3. 未然形の「ま」をたてるか

まず、助動詞「む」の未然形に「ま」をたてているかという点から調査を行っ

(4)

た。結果は以下の通りである。

(5) 表1 未然形の「ま」をたてるか

[大修館 1]	活用表中に「(ま)」あり。脚注に説明あり。挙例あり。
[数研]	活用表中に「(ま)」なし。脚注に説明と挙例あり。
[第一学習 1]	活用表中に「(ま)」あり。説明・挙例なし。
[大修館 2]	活用表中に「(ま)」あり。説明・挙例なし。
[右文書院]	活用表中に「(ま)」なし。説明・挙例なし。
[第一学習 2]	活用表中に「(ま)」あり。説明・挙例なし。
[桐原書店]	活用表中に「(ま)」あり。脚注に説明と挙例あり。
[東京書籍]	活用表中に「(ま)」なし。説明・挙例なし。
[第一学習 3]	活用表中に「(ま)」あり。脚注に説明と挙例あり。
[京都書房]	「む」「むず」の活用表中には「(ま)」はないが、奈良時代の用法として、別立てで説明している。
[文英堂 1]	活用表中に「(ま)」あり。脚注に説明と挙例あり。
[筑摩]	活用表中に「(ま)」あり。脚注に挙例と説明あり。同じ箇所にく語法の情報あり。
[文英堂 2]	活用表中に「(ま)」あり。脚注に説明あり。挙例なし。
[明治書院]	活用表中に「(ま)」なし。脚注に説明と挙例あり。
[三省堂]	活用表中に「(ま)」あり。説明・挙例なし。

ご覧の通り、未然形の「ま」をたてるものと、たてないものとが混在している。活用表中に「ま」がある場合は、どの古典文法書も「(ま)」のように、( )をつけて示している。また、活用表中に「(ま)」が見られない場合でも、脚注で、「む」の未然形について説明をしているものもあった。なお、「まほし」の成り立ちのところで、「む」の未然形である「ま」に言及しているものもある([筑摩] や [三省堂] 等)。

一方、[右文書院] と [東京書籍] には、「む」の未然形である「ま」に関して、特に説明はないようである。

まとめると次のようになる。

(6) a) 活用表中に「ま」があるもの：

[大修館 1] [第一学習 1] [大修館 2] [第一学習 2] [桐原書店]  
[第一学習 3] [文英堂 1] [筑摩] [文英堂 2] [三省堂]

b) 活用表中に「ま」はないが説明等があるもの：

[数研] [京都書房] [明治書院]

c) 「ま」への言及がないもの：

[右文書院] [東京書籍]

「む」の未然形である「ま」については、次のような説明が多い。

(7) 未然形の「ま」は、奈良時代に接尾語「く」に連なり、「まく」〔ダロウコト〕の形で用いられるだけである。([大修館 1] p.60)

(8) 奈良時代には、未然形「ま」があり、接尾語「く」が付いて「まく」(…ダロウコト・…ヨウナコト)の形でのみ用いられた。([桐原書店] p.58)

つまり、次のような例に触れるかどうかということだろう。

(9) 梅の花散らまく惜し<sup>・</sup>みわが園の竹の林に鶯<sup>うぐひす</sup>鳴くも (万葉集・八二四)  
([第一学習 3] p.52 の挙例より。傍点やゴシックも引用元の通り。なお、引用元は「ま」の部分が赤字である。)

#### 4. 「ん」「んず」の表記に言及があるか

「ん」「んず」の表記に関する調査結果は、以下の通りである。

##### (10) 表 2 「ん」「んず」の表記に言及があるか

[大修館 1]	「ん」及び「う」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「平安時代以降「む」は「ん」とも書かれるようになり、鎌倉時代以後は「う」にも変化した。(p.60) とある。
[数研]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「む」は、大体、奈良時代には [mu] と発音され、平安時代には [m] からさらに [n] と発音されるようになって「ん」と表記されることもある。(福嶋注:改段落) 音読するときには、「ン」と発音すればよい。(p.60) とある。
[第一学習 1]	「ん」への言及あり。「んず」の表記あり。「む」は「ン」と発音しますが、『平家物語』など中世以降の作品には表記も「ん」とするものが多くみられます。これは表記の違いであって意味的な違いは全くありません。(p.66) とある。

[大修館 2]	「ん」への言及あり。「ん」「んず」の表記あり。「[む]」は、発音の変化に従って、平安時代の終わりごろから「ん」とも書かれるようになりました。「けむ」「らむ」の「む」も同じです。」(p.57) とある。
[右文書院]	活用表中に「ん」「んず」の表記あり。
[第一学習 2]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「[む]」は「ン」と発音するが、『平家物語』など中世以降の作品では、表記も「ん」とするものが多くみられるようになる。」(p.60) とある。
[桐原書店]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「[む]」[mu] は、平安時代に [m] [n] と発音されるようになり、「ん」と表記されるようになった。」(p.58) とある。
[東京書籍]	「ん」への言及あり。「ん」「んず」の表記あり。「[む]」は平安時代の末ごろからの発音の変化に伴って、「ん」と表記されることもあった。他の助動詞「むず」「らむ」「けむ」などの「む」も同様である。」(p.50) とある。
[第一学習 3]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「助動詞「む」は、奈良時代までは「ム」と発音されていたが、平安時代以降「ン」と発音されるようになり、平安時代後期には「ん」とも表記されるようになった。「むず」「らむ」「けむ」などの「む」も同様である。」(p.52) とある。
[京都書房]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「[む]」「むず」を、「ん」「んず」と表記することもある」(p.74) とある。
[文英堂 1]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「[む]」「むず」などの「む」の発音は、平安時代以降「ン」に変化する。そのため、「む」は「ん」とも表記される。」(p.62) とある。
[筑摩]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「推量の助動詞「む」あるいは「ん」は、奈良時代には [mu] と発音され、平安時代に [m]、さらに [n] と変化していった。仮名も「む」「ん」とともに十世紀には [mu] を表していたが、次第に「ん」は撥音を表すようになっていった。」(p.64) とある。
[文英堂 2]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「[む]」は、平安時代以降「ン」と発音されるようになり、平安時代後期には、表記も「ん」が用いられるようになった。」(p.68) とある。
[明治書院]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「[む]」は平安時代の頃から、mu の母音が落ちて、m と発音されるようになり、「ん」と書かれるようになった。「むず」「けむ」「らむ」などの「む」も同じである。」(p.64) とある。
[三省堂]	「ん」への言及あり。活用表中に「ん」「んず」の表記あり。「[む]」は、発音が「む」→「ん」と変化したため、「ん」と表記されることもある。」(p.74) とある。

調査した全ての古典文法書で「ん」「んず」の表記が示されている。よって、情報量に差はあるが、見解は概ね一致しているといえる。このため、「ん」「んず」という表記に関しては、古典文法書で学習した高校生であれば、ある程度、共通した情報を有していると考えてよいように思う。

## 5. 「む」と「むず」の意味に違いがあるとするか

「む」と「むず」の意味に違いがあると考えられるのだろうか。以下に調査結果を示したい。あわせて、「むず」の成立について言及しているのかということも述べる。

(11) 表3 「む」と「むず」に違いがあるとするか

[大修館 1]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及なし。
[数研]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「「む」よりやや意味が強い。」(p.60)とある。
[第一学習 1]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及なし。「「む」と同じはたらきをする助動詞に「むず(んず)」があります。」(p.67)とある。
[大修館 2]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「「む」より語調が強く、平安時代には上品でない言葉とされて、主に会話で使われました。(福嶋注：改段落)鎌倉時代には、軍記物語などで盛んに使われるようになりました。」(p.58)とある。
[右文書院]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「平安時代にあらわれ、鎌倉時代に多く用いられた。「む」の意味をやや強めた言い方である。」(p.40)とある。
[第一学習 2]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及なし。「「む」と同じはたらきをする助動詞に「むず」がある。」(p.60)とある。
[桐原書店]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「意味は、「む」と同じ。平安時代に会話文で用いられ始め、後に地の文でも使われるようになった。」(p.58)とある。
[東京書籍]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「平安時代以降、主に話し言葉の中で用いられた。」(p.50)とある。「チェック」という欄で「む」と「むず」の違いを問うており、「むず」の方がより口語的な言葉とする。
[第一学習 3]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「「む」より意味がやや強い。」(p.52)とある。
[京都書房]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及なし。「「む」と同じ意味です。」(p.74)とある。「「む+ず(打消)」と勘違いしないよう、「むず=む」と置き換える習慣をつけましょう。」(p.74)とあり、両者に違いがないと解釈できる。

[文英堂 1]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「[む]とほぼ同義であるが語気はより強く、おもに鎌倉時代以後に用いられる。」(p.62)とある。
[筑摩]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「意味は[む]と同じである。平安時代に会話を中心に用いられ、次第に地の文にも拡大した。」(p.65)とある。
[文英堂 2]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「助動詞[む]よりやや意味が強い。打消の助動詞「ず」とは無関係。」(p.68)とある。
[明治書院]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「[む]よりやや語気が強い。鎌倉時代に多く用いられた。」(p.64)とある。
[三省堂]	「むず」の成立に言及あり。両者の違いに言及あり。「[む]より推量や意志の確実性が強い傾向にある。」(p.74)とある。

全ての古典文法書において、「むず」の成立には言及がある。例えば、次のようなものである。

(12) 「むず」は、「む+と+ず」という形からできた、とされています。

([大修館 2] p.58. 太字も引用元の通り)

一方、「む」と「むず」の違いについては、その記述内容はまちまちである。両者に違いはないという古典文法書もあれば、違いがあるという古典文法書もある。また、両者に違いがあるという場合でも、「むず」の方が口語的という場合もあれば、「むず」の方が、やや意味が強い、あるいは、鎌倉時代に多く使用されるようになった、という場合もある。

抜粋してまとめると次のようになるだろう。

(13) a) 「む」と「むず」の違いに言及しているもの：

[数研] 「[む]よりやや意味が強い。」(p.60)

[大修館 2] 「[む]より語調が強く、平安時代には上品でない言葉とされて、主に会話で使われました。(福嶋注：改段落) 鎌倉時代には、軍記物語などで盛んに使われるようになりました。」(p.58)

[右文書院] 「平安時代にあらわれ、鎌倉時代に多く用いられた。「む」の意味をやや強めた言い方である。」(p.40)とある。

[桐原書店] 「意味は、「む」と同じ。平安時代に会話文で用いられ始め、後に地の文でも使われるようになった。」(p.58)



- [東京書籍]「平安時代以降、主に話し言葉の中で用いられた。」(p.50)
- [第一学習 3]「「む」より意味がやや強い。」(p.52)
- [文英堂 1]「「む」とほぼ同義であるが語気はより強く、おもに鎌倉時代以後に用いられる。」(p.62)
- [筑摩]「意味は「む」と同じである。平安時代に会話文を中心に用いられ、次第に地の文にも拡大した。」(p.65)
- [文英堂 2]「助動詞「む」よりやや意味が強い。打消の助動詞「ず」とは無関係。」(p.68)
- [明治書院]「「む」よりやや語気が強い。鎌倉時代に多く用いられた。」(p.64)
- [三省堂]「「む」より推量や意志の確実性が強い傾向にある。」(p.74)

b) 「む」と「むず」の違いに言及していないもの、あるいは、両者に違いはないと解釈できるもの：

- [大修館 1]
- [第一学習 1]「「む」と同じはたらきをする助動詞に「むず(んず)」があります。」(p.67)
- [第一学習 2]「「む」と同じはたらきをする助動詞に「むず」がある。」(p.60)
- [京都書房]「「む」と同じ意味です。」(p.74)、「「む+ (ず(打消))」と勘違いしないよう、「むず=む」と置き換える習慣をつけましょう。」(p.74)

「む」と「むず」の違いについて統一的な見解のないことがよく分かる。

「む」と「むず」の違いについて述べていない古典文法書もあるので、(このような状況であることを認識せずに)「む」と「むず」の違いを大学入試等で問うことは、積極的に肯定できることではない。また、大学で古典文法教育を行うにあたって、このような状況であることを把握しておいた方がよいと思われる。

## 6. まとめと「む」「むず」にまつわる難しさの背景：

### 国語教育と歴史的文法研究の接点

本稿の調査結果をまとめたい。本稿冒頭の(2)に対応させる形で示す。

(14) (= (2))

- (i) 未然形の「ま」をたてるか
- (ii) 「ん」「んず」の表記に言及があるか
- (iii) 「む」と「むず」の意味に違いがあるとするか

「未然形の「ま」をたてるか」については、未然形の「ま」に言及がない古典文法書もあった。このため、古典文法書で学習した高校生であっても、共通した情報を有していない可能性がある。

「ん」「んず」の表記に言及があるかについては、情報量に差があるものの、調査した全ての古典文法書で「ん」「んず」の表記が示されていた。このため、古典文法書で学習した高校生であれば、ある程度、共通した情報を有していると考えてもよいだろう（共通した情報を有している可能性が高い）。

「む」と「むず」の意味に違いがあるとするかについては、両者の違いに言及していない古典文法書もあった。このため、古典文法書で学習した高校生であっても、共通した情報を有していない可能性がある。

「む」と「むず」の違いを大学等の入試問題で問うことは妥当か」という問いに対しては、繰り返しになるが、「む」と「むず」に違いはないと解釈できる古典文法書もあることから、「積極的に肯定できることではない」といえる。

古典文法書は、学習者のレベルや興味にあわせられるよう、内容にバリエーションがあった方がよいともいえる。本稿の調査も、古典文法書の優劣を論じるためのものではないし、「詳しくればよい」ということでもないだろう。ただ、このような状況であるということ、古典文法の関係者は、知っておく必要があると思う。

最後に「む」と「むず」の違いについて、次のことを述べたい（詳細は、福嶋 (2011ab)、福嶋 (2014)、福嶋 (2018)、福嶋 (2020) を参照のこと）。

端的にいえば、古代語（古典文法書で主たる対象とされる言語のこと）は、現代日本語とは、言語のタイプが異なるといえる。古代語は、「ムード優位言語 (Mood-prominent language)」だと考えられる。

「ムード優位言語」とは、〈非現実 (irrealis)〉と〈現実 (realis)〉の区別に

敏感な言語のことである（詳しくは Bhat (1999) 参照）。古典文法書の中にも、[筑摩] 等で「む」は基本的にその出来事が実現していないことを表す。」(p.65、ゴシック原文) とある通り、助動詞「む」「むず」は、基本的に〈非現実〉を表す形式である（この点は、山田 (1908)、川端 (1997)、井島 (2014)、小柳 (2014) 等も参照のこと）。例外はあるものの、古代語では、〈非現実〉のことを表す際に、「む」「むず」等の助動詞を、かなり義務的に接続させているので、「ムード優位言語」の特徴を有していると思われるのである。

現代日本語の「明日、私がそこに行く」「おそらく彼がそこに行く」等の下線部分は、〈非現実〉の出来事を表している。現代日本語では、「行く」という動詞基本形（スルのこと、ハダカ形ともいう）で表現しているが、古代語では「む」「むず」等の〈非現実〉を示す形式を接続させて表現するだろう。一方、古代語の動詞基本形は、〈非現実〉の出来事を表しにくかった。このため、結果として、古代語の「む」「むず」の表す領域の多くは、現代日本語の動詞基本形が表している領域と重なっている。なお、よく知られていることだが、古代語の動詞基本形は、現代日本語とは異なり、〈現実〉の領域に広く分布している（鈴木 (2009)、福嶋 (2014) 参照）。例えば、次の例にみるような、目の前で行われている動作について使用したりするのである。

(15) 銀のしろかね金かなまり椀わんを持ちて、水を汲み歩あく。(『竹取物語』)

(訳：銀の椀を持って、水を汲み歩いています。：『新編 日本古典文学全集』の当該部分の訳)

(15) の下線部分は、現代日本語では、「歩いている」のように「ている」で解釈したいところだが、古代語には、まだ、そのような形式はなかった。

ところが、中世末期頃から、「ている」という形式が台頭し、「む」「むず」の後継の形式である「う」「うず(る)」や、動詞基本形等の分布をも巻き込んだ、次のような変化がおきた（詳しくは、福嶋 (2011a)、福嶋 (2014)、福嶋 (2018)、福嶋 (2020) 等を参照のこと。次の表は福嶋 (2020) からの引用である。ただし、表タイトルの一部を変更している）。

(16) 表 4 古代語から現代日本語への体系の変化

	〈非現実 (の一部)〉	〈現実 (の一部)〉
古代日本語	む・むず	動詞基本形
中世末期日本語	う・うず(る)	動詞基本形 ている
現代日本語	(う) 動詞基本形	ている

古代語の「む」「むず」のところには、現代日本語では動詞基本形が分布し、古代語の動詞基本形のところには、現代日本語では「ている」が分布している。現代語日本語では、〈非現実〉のことを表す場合に、特別な助動詞を接続させる必要はない。つまり、現代日本語は、もう「ムード優位言語」ではない。

最初に古代語を見たとき、「む」や「むず」等、感覚的に捉えがたい表現があると感じた方もいると思うが、その第一印象は、両言語の差を捉えたものともいえる。言語のタイプが異なるため、「〈非現実〉を表す場合に、ほぼ義務的に助動詞が必要」という、かつてあった感覚自体が、現代ではなくなっていると考えられるのである。

「む」「むず」が表す〈非現実〉という概念自体が、やや抽象的なものであり、今述べたように、その使用方法も、我々の感覚では捉えにくいものである。さらに、「む」と「むず」の違いとなると、より難しいものになる（「む」「むず」「べし」の違いという問題にもなってくるだろう）。

「む」と「むず」の違いをどこまで高校生に示すのかというレベルになると、「何のために古典文法を教えるのか」という根本的な問題に向き合う必要もあり、一概に結論を述べることはできない。しかし、次のことは言えるだろう。「む」と「むず」の違いは何か」ということが含む難しさは、「〈非現実〉を義務的に示す形式同士の違いは何か」という問題に繋がることであり、その背景には、言語のタイプの変化が関与している。さらに、言語のタイプの変化の背景には、「む」「むず」の後継の形式である「う」「うず(る)」や、動詞基本形等の分布をも巻き込んだ、「ている」の台頭に伴う、体系的な変化があったと考えられるのである。国語教育における、「む」と「むず」に関する難しさと、歴史的な文法研究における「ている」の台頭は、一見、全く無関係に見えるが、このように見ると、繋がってくるのである。この点に、国語教育と歴史的な文法研究の接点を垣間見ることができ、興味深いと思われる。

#### 〈引用文献〉

井島正博 (2014) 「上代・中古語の推量表現の表現原理」『日本語複文構文の研究』

ひつじ書房, pp.249-278.

小田勝 (2014) 「高校生向け古典文法書における文法用語・文法説明のゆれについて」『岐阜聖徳学園大学 国語国文学』33, pp.102-91.

小田勝 (2016) 「古典文法の学習参考書を読む—古典文法研究者の立場から」『岐阜聖徳学園大学 国語国文学』35, pp.108-118.

川端善明 (1997) 『活用の研究Ⅱ』清文堂

小柳智一 (2014) 「古代日本語研究と通言語的研究」『日本語学と通言語的研究との対話』くろしお出版, pp.55-82.

鈴木泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房

福嶋健伸 (2011a) 「中世末期日本語の～ウ・～ウズ(ル)と動詞基本形—～テイルを含めた体系的視点からの考察」京都大学『国語国文』80-3, pp.44-64.

福嶋健伸 (2011b) 「～テイルの成立とその発達」『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版, pp.119-149.

福嶋健伸 (2014) 「従属節において意志・推量形式が減少したのはなぜか—近代日本語の変遷をムード優位言語からテンス優位言語への類型論的变化として捉える」『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, pp.347-382.

福嶋健伸 (2018) 「新しい学説はどのように古典文法教育に貢献するのか—～ム・～ムズの違和感を言語類型の変化とテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷から説明する」日本語文法学会『日本語文法』18-2, pp.11-27.

福嶋健伸 (2020) 「古典文法書間で「む」「むず」の記載内容はこんなにも違う—「古典文法教育が苦痛であること」の本当の理由」実践女子大学『実践國文學』98, (左) pp.1-16.

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』寶文館

Bhat, D.N.S (1999) *The Prominence of Tense, Aspect and Mood*. Amsterdam: Benjamins.

## 〈引用テキスト〉

特に断りが無い場合は、『新編 日本古典文学全集』（小学館）を使用している（便宜上、表記等を筆者が変更している場合がある）。

## 〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金（課題番号：19K00631、基盤研究（C）、研究代表者：福嶋健伸）の研究成果の一部を含んでいる。

（ふくしま たけのぶ・実践女子大学教授）